

追悼・堺鉦二郎氏を偲んで

田 中 昇 平

堺鉦二郎氏の突然の他界に、ただ驚いて未だに心の整理がつかぬままに過ごしている私である。

氏と出会ってから半世紀近くになるが、振り返ると過ぎし日のことごとが、まざまざと浮かび上がって来る。

最初の出会いは、札幌大学の開学まもない1968年春で、長い交流の端緒であった。その過程で、氏が労働法、社会保障法、法社会学の研究者であり、剛毅で寛大な人柄であることを知った。

そして氏とのかかわりがとくに増したのは、開学15周年に達した1980年代初めごろである。そのころは、本学が草創期の厳しい諸問題を乗り越え、教職員が内発的な力を結集して新しい展開を図ろうとする時期であった。

大学の将来像づくりをめざして、1981年12月に発足した「特色検討委員会」が40余回の議論を経て、当時の武田孟学長に『新しい札幌大学への道』を上申したのは、1983年7月のことであった。このような地道な準備にもとづいて「法学部づくり」がスタートするのであるが、その経緯については、堺氏自身による寄稿文を参照されたい（『札幌法学』第10巻・1999年、同第20巻・2009年）。

こうして「法学部の設置」をめぐる、氏と私に関与する協同作業はじまった。

当時、私は経済学部に着任しておいて法人の常勤理事の任に当たっていたが、新学部づくりは、本学がはじめて全学的に取り組む発展計画であったから、身の引き締まる思いで臨んだ。ただし、法律を専門領域としない者としての私のスタンスは、当然のことながら法学者堺氏の仕事を、

可能な範囲で側面から支援することであった。

作業は、基盤となる「基本計画の策定」についての各学部教授会や教学評議会の審議、理事会による財政計画の提示、全学教職員への説明などの手続きを経て、新学部を「法学部」と定めることから開始された。

その過程で学科名が「法学科」と指定されたが、そこに至るためには並々ならぬ苦心があった。そのカリキュラムには、「広い視野における確かな判断力を養成する」リーガルマインドへの道が用意され、専門課程には「企業法務」と「行政」の2コースが設けられた。その着想は、「経済社会学」を担当して理論と実践の狭間にあった私の学究方針にも共鳴するところがあり、氏が、地域の社会的要請を汲み取って現実世界に積極的に対応する姿勢の持主であると感じた。

また、文部省への申請書の「設置の趣旨」の作成過程では、氏はきわめて慎重で緻密な点検を重ねた。このとき学内にあって堺氏を支えたのは法律学にかかわる「専門委員」の諸氏であった。膨大な申請書類の作成のため、担当の黒沢勝昭企画課長をはじめ関連各課の職員も身をすり減らす思いで働いた。ついには高齢の武田学長や病身の地崎宇三郎理事長も自ら文部省や私学財団に赴いて挨拶や折衝を行った。

文部省当局との直接交渉は熾烈であった。正規の交渉が15回、準備的な打診や交渉を含めると、30数回におよぶ折衝が行われた。私はその他に研究棟など施設建設の役割も担当していたので、週に3度上京することもあり、かなりの体力を要する仕事であった。ときには交渉状態の硬化に我慢しきれなくなって係官に迫ったこともあったが、そんなときに私の袖を引いて割って入ったのも堺氏であった。忍耐強く柔軟な対応が出来る人だと思った。

こうした交渉過程と並行して人事も進められた。内山尚三氏への学部長予定者就任の依頼は至難なことであったが、承諾されたあとは進んで協力してくださった。その結果、大学、裁判所、企業などにあってわが国の法曹界をリードするような人々や新進気鋭の研究者諸氏に出会うことになり、大いに刺激を受け学ぶところがあった。同時に、堺氏がこの

ような人脈につながっていることを、驚きつつ嬉しく感じたものである。

1987年7月、文部省への法学部設立の申請がなされ、その後、同省内でヒヤリングが行われた。最終的関門であった。このようにして設立事業は木村真佐幸学長のもと、法人理事会を含む全学的な努力によつて推進された。その結果、1988年12月、設置の認可が通達され、翌年4月、政令指定都市には新設しがたいはずの法学部が開設された。そのとき私は理事の任を離れていたが、堺氏が内山新学部長や就任予定者を迎えて所期の目的を達成された際には、心から安堵し感激した。氏の思いは如何ばかりであつたらう。

その後、氏は新しい内山学長のもとで策定された「第2次基本計画」にもとづいて「大学院づくり」の構想に参画し、1997年には「法学研究科」の開設を実現することになった。

このように堺氏は、「法学部の開設」という事業について、忍耐強い確固とした意思と柔軟な現実対応力をあわせもって臨んだが、その行動力の背景には、周到な理論的準備と関係する人々への誠実な配慮が用意されていたと思っている。氏は、本学の全学的協力に発する発展計画に嚆矢を放ち、札幌大学のその後の将来計画のための水路を開鑿した人と言えるであろう。そして今は、「法学部」の行方を見守りながら、その発展を願っていることであろう。

本文では、勝手ながら法学部開設時の多くの関係者名を略して記述したが、すでに相当数の方々が他界されている。故人となられた人々のご冥福とともに、堺鉦二郎氏の急逝を深く悼み、安らかな休息を祈りたい。